

目的 人権思想や平等理念が浸透し、しつけが子どもとの相互作用の過程を通してなされていく現代の家族において、しつけ不安や混乱を引き起こす原因のひとつに、親の保護や規制を弱め子どもの自主性を尊重すべき時期や程度について、依拠すべき明確な規準がないことが挙げられる。そのため子どもの成長とともに、しつけの仕方や家庭生活上の規範の遵守をめぐる、親子の間に深刻な葛藤や対立が生じやすいという問題がある。本稿では、葛藤が顕在化してくる時期の子どもと母親が子どもの自律心の発達をどう受けとめ、親の役割と権威の正当性をどう認知し合っているかという点を中心に、子ども部屋における親子の生活分離の傾向や孤立化の問題についても検討した。

方法 昭和58年9月初旬に北九州市内の公立中学校の生徒とその母親を対象に調査を行った。725部の調査用紙を配布し、637部を回収し、父子家庭や母子家庭や記入ものの多いものを除き、1年生189組、2年生199組、3年生206組を分析の対象とした。

結果 もう子どもではないと自己規定する者が3年生になると5割に達するが、3年生の母親でも7割はまだ子どもだと考えているため、母親から子ども扱いされることに不満をもつ者が多い。子どもの自主性尊重の時期については親子ともに事柄によって異なる一方、自主性を認めるべきだと考える者が大々数を占めるようになる時期が子どもでは中学生段階であるのに対し母親は高校卒業後と遅く、親と子の考え方に大きなずれがある。また、子ども部屋についても個人志向を強めているという潜在的な機能に対する母親の認識が薄いなど、全般的に子どもの自律心の発達への母親の対応の遅れが目立つ。